

石井米雄

『タイ仏教入門』

めこん, 1991

東南アジアの宗教社会学への招待

本の内容に入る前に、読者の皆さんに向けて質問が一つ。

「社会」を理解するため、宗教に目を向ける理由は何だと思いませんか？

きっと、次のような答えが出るだろう。「東南アジアの人々は信仰心が強いから」。「宗教施設に溢れんばかりの人々が集まっているから」。「日々の生活で儀礼行為が頻繁に見られるから」。つまり、生きている宗教の世界がそこにあるからということになるだろう。

社会の近代化が進み、政教分離という政策の下でパブリックな場面から宗教が遠ざけられた現代の日本からみれば、いま東南アジアと呼ばれる地域ならばどこでも、精霊信仰、祖先崇拜、仏教、イスラーム、キリスト教、その他諸々の宗教が人々の生活の中心にあるような状況を観察できるだろう。それならば、その社会を理解しようとする際に宗教を考えることは必

然である。対象とする人の行為を理解するには、彼／彼女らの道徳や価値観が、いかに宗教に影響されているのかを解き明かす必要がある。そのような関心から宗教の内容を知るには、聖典に書かれた教えを学び、それがいかに人々によって理解されているのかを確かめる必要がある。

しかし、それだけではない。人々の行為がいかに宗教（の理念や価値）に規定されているのかを問うのではなく、その社会が、いかにしてその宗教を存続させているのかと考えることもできる。便宜上ここでは、宗教という言葉の意味内容から、身体や自然の生命力やその循環、または靈的存在への信仰などの部分はいったん除外しておきたい。代わりに、いわゆる世界宗教を議論の中心におく。東南アジアでは現在、仏教、イスラーム、キリスト教が、多くの人々によって信仰されている。しかしそれらは、アラブ世界やインドに起源をもつ外来のものだ。数百年以上の昔に、今日東南アジアと呼ばれるようになった地域に伝えられ、信仰が続いてきたものだ。では、東南アジアの各地の社会は、いかにしてその外来の宗教を支えてきたのか。それらの宗教は、どのような社会的制度の下で、その活動を存続させてきたのか。これは、宗教社会学という学問領域の中心となる問いである。

東南アジアの仏教

仏教は、今から2500年以上前に、ガウタマ・シッダールタという名前を授けられた北インドの釈迦族の王子が、老病死という苦からの解放を求めて修行者となり、その後自らが悟った教えを衆生に説いたことを契機にインドで始まった。ブッダと呼ばれるその創始者は、45年のあいだ教えを説き、80歳でこの世を去った。その教えは弟子たちによって継承されるが、100年ほど経った後、一つの対立が生じた。ブッダが生前に示した教えの規則を保守的な立場から変わらず遵守しよう主張した弟子たちと、進歩的な立場から社会の時流に合った新しい解釈も許容すべきと考えた弟

子たちの対立である。それ以後、仏教は大きく二つの伝統に分かれた。今日のスリランカや東南アジアの人々が信仰する仏教は、保守的な立場の伝統に従うもので、ブッダが生きた時代の修行を変わずに行うことを特徴とする。他方、東アジアなどに広まった仏教は、戦乱や災害、貧窮や病苦に揺れ動く社会を生きてきた各地・各時代の人々に具体的な救いの道を示すため、さまざまな指導者によりブッダの教えに拡大解釈が加えられ、教理の多様な発展形を示すようになったものである。

しかし、その東南アジアの仏教が、ブッダの時代の原始の仏教の形を今も維持していると評価されることは不思議ではないか。ブッダがその教えを興したインドの歴史世界と、現代の東南アジアとでは、社会の状況が大きく違うはずだからである。なぜ、そのような形の仏教が、タイの地で、はるか昔と変わらない特徴を維持したまま存続できているのだろうか。

タイには「二つの仏教」がある

本書は、タイの仏教を、タイ人の視点に立って考え、タイという国の社会に内在する論理から理解しようと試みる。あとがきを含めてボリュームは200頁に満たない。使われている言葉は、一部の仏教用語を除けば非常に平易である。

本書は、まったく異なった原理をもつ二重の構造をタイの仏教の中に見出す。タイには出家者の仏教と、在家者の仏教という「二つの仏教」があると述べるのである。その「二つの仏教」が組み合わさった構造的特徴を理解することが、保守的な古い形の仏教がこれまでタイ社会に息づいてきた理由を解き明かす鍵であると著者はいう。

上座仏教の最大の特徴は、戒律に基づく出家と在家の厳密な区別である。戒律とは、ブッダが定めた修行上のルールで、「○○をしてはいけない」という禁止条項の形で示される。現世の生活を棄てて、寺院に住み、悟りを目指して修行に集中する出家者の生活は227もの「してはいけない」

ルールで縛られている。悟りに至るにはそれが必要だとブッダが定めたからである。2500年以上前に作られた戒律をただただ守り、実践し、超俗的な出家生活を送る僧侶たち。こうした出家者に着目するならば、その仏教を、ブッダの時代から変化しない原始的なものとするのも無理はない。しかし、人間として生をこの世に受けた存在のうち、そのような修行の道に進むことができるのは極めて少数である。では、その道に進めなかった者はどうすればよいのか。

その疑問は問題とならない、と筆者は述べる。世俗に留まる者たち（在家者）は、出家の道に進めなかったという無念や劣等感と無縁の、もう一つの仏教を生きているからである。そこで人々は、功德という一種の精神財が幸せを保証すると考える。ブッダの時代の原始的な形を保持すると評される出家者の仏教は、功德を核とする在家者の仏教によって支えられているのである。功德の効果は、来世を待たず、現世から発現する。功德は人々が善きものとするさまざまな行為から生じ、当人と共に、他者の幸せも保証する。ブッダが定めた修行の道を進む出家者を支えるさまざまな行為——出家者となること、その住まいを提供すること、それに食べ物を寄進すること等々——は、そのような功德を生み出す代表的な行いである。

本書はさらに、「二つの仏教」からなるタイの仏教が、19世紀以降の社会の近代化の中で国家によりどのような制度を与えられたかという点を、現地語の歴史資料をもとに詳しく説明する。そのタイ仏教の制度化の部分は、本書を手にとって実際に読んでほしい。そうして、外来の宗教である仏教が、タイ社会に根付き、今日まで息づいている不思議についての、著者による見事な謎解きをぜひ目撃してほしい。

地域研究の古典としての価値

本書は1991年の出版だが、同じ著者の『小乗仏教—戒律の救い』（1969年、淡交社）と内容はほぼ同じである。つまり、執筆から半世紀を越えて

読み継がれていることになる。半世紀以上前の出版であるため、当然ながら、現地の情報としては古くなっている部分がある。しかし、「二つの仏教」という分析視角は、タイ社会だけでなく、カンボジアやラオス、ミャンマーなどの地域の社会と人々の暮らしを理解するうえで、現在も揺るぎない説得力をもつ。

対象とする現地の人々に寄り添う姿勢は、地域研究の定石であり、またその精粹でもある。本書の著者の石井米雄は、20世紀半ば以降に始まった日本の東南アジア研究の「父」である。1953年に東京外国語大学でシャム語（タイ語）を学び始めてから、一貫してタイ社会に関心を持ち続けた。大学を中退して外務省に入省し、1957年から7年間もの長期にわたってタイに暮らした。滞在最初の2年間は外務省留学生としてチュラロンコン大学で学び、東南アジア大陸部を広く旅した。さらに、首都バンコクの名刹で上座仏教僧侶として出家した。石井はその後1963年に帰国し、本省で勤務した後、1965年に京都大学へ出向して研究者としてのキャリアを歩み始めた。石井は、タイの言葉を使いこなし、長い期間生活を共にすることを通じて現地の人々のものの見方を深く理解し、また上座仏教徒社会における僧侶という社会的存在を実体験していた希有な人物であった。

地域研究においてはまた、対象に接近して寄り添うだけでなく、その対象が示す特徴を客観的に捉えるために外部者の視点に立って考える姿勢も大切である。東南アジア研究者としての石井は、ラテン語を始めとした西洋諸語に大学入学前から親しみ、キリスト教にも関心を持っていた（石井 2003: 149）。そして、学生時代には実際に教会に通って洗礼を受けるまでになった。仏教という宗教がタイ社会において果たしている役割を、西洋社会でキリスト教が果たしてきた歴史的な役割を念頭に置きつつ比較の地平で考える視座に石井が立っていたことは、本書の内容を理解するための重要な背景情報である。石井は、初めての単著である本書で、タイを事例に東南アジアの仏教の社会的な位置づけを日本の読者に紹介した。そし

てその後、『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』（1975年、創文社）において、キリスト教との比較の視点をより強く打ち出したタイ仏教社会研究の集大成を発表した。東南アジアの地域研究と宗教社会学の古典として、こちらの著作もぜひ手に取ってほしい。

参考・関連文献

石井米雄. 1969. 『世界の宗教 8 戒律の救い—小乗仏教』 淡交社.

——. 1975. 『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』 創文社.

——. 2003. 『道は、ひらける—タイ研究の五〇年』 めこん.

林行夫（編集協力）. 2011. 『新アジア仏教史 04 スリランカ・東南アジア 静と動の仏教』 佼成出版社.

和田理寛ほか. 2021. 『東南アジア上座部仏教への招待』 風響社.

❖本書の著者紹介（石井米雄）

日本における東南アジア研究の代表的研究者。海外渡航が難しかった戦後の状況下で、とにかくタイに行きたいという理由で外務省の役人になり、現地へ向かった。研究者に転じてからはタイの社会と歴史に関する優れた著作を発表するだけでなく、文理融合型の共同研究に基づくタイと東南アジアの研究を京都大学で推進した。その後上智大学や神田外国語大学でも教鞭をとった。

❖執筆者紹介（小林 知）

京都大学東南アジア地域研究研究所教授。戦争や災害、国家などの大きな権力による干渉に翻弄されながら、しぶとく生き抜こうとする人々の姿に興味を抱き、1990年代末にカンボジア農村でフィールドワークを行った。当初はカンボジアの人々の生活を理解するために始めた仏教の研究だが、近年は仏教そのものも調査している。宗教だけでなく、生業活動や食文化を通して人々の生活の変化の意味を考えることにも関心がある。